江戸っ子だってねェ！　神田の生まれよ！

koberyo1

昭和22年ごろから時々、思った。弘前での生活はあまりにも満ち足りていた。世の中、食べるものにも事欠くありさまだった。
敗戦まもなくの日本人の生活は惨めなもので、毎日が食べものの争奪戦であった。
東京の父からは、その物資窮乏の状況を手紙でしらせてきた。
「いつも元気で頑張っているよ」と手紙には毎回おなじフレーズが書かれていた。
父は東京の空で家族のために一人で頑張っていた。かたやわたしはといえば、戦後は母の実家の青森で農業の真似事をし、腹いっぱいご飯を、しかも白米を食べている自分が申し訳なかった。
しあわせ者だと思った。人様の生活が深刻な窮乏に喘いでいるというのに、自分はいつまでこのような腹いっぱいの暮らしをつづけてよいものか、引け目のようなものを感じたりしていた。

その頃、心の中で向学心に燃えていた。終戦で海軍を除隊し、ちょうど高校を卒業そたあたりの年頃になっていた。
ときどき、時間をみつけては弘前高校にふらり、といったみた。
校舎は木造で廊下を歩くたび、きしむ音がした。学生の姿はどういうわけかあまり見かけなかった。閑散とした淋しい学校だな、と思ったことを記憶している。

早稲田での学生の多さを眼にしていたので、この学校はいささか気味が悪かった。
こういうこともあって都会への憧れが再燃してきた。農家の生活をこのまま続けてよいものだろうか。ここは青森。一年の半分は雪と格闘する生活である。自分に向いていないh思っていた。自分で稼ぐ道を求めて、自分の力で生きるべきと内心で決めていた。父だけ東京で一人、苦労をかけてよういものだろうか、と反省を込めて思っていた。同時に感謝もしていた。

昭和22年の秋には、お米はぶじ収穫できたし、林檎の方も台風の影響もなく無難な年であった。
海軍時代、H一等兵から聞いていたこと、すなわち「戦争はまもなく終わる。終われば商業の時代がくる。商業簿記を勉強することで自分の一生を決めることができる」と教えてもらったことが頭をよぎった。

昭和23年の正月を過ぎた頃、上京したい旨のことを手紙を父に書いた。「食糧がないので大変だぞ」という返事がすぐにきた。当面は父と勉強しながら、「簿記の勉強を

したいから早稲田実業の卒業証明書を入手できないものだろうか」と自分のワガママと詫びを入れた手紙をだした。

　その結果、「早稲田実業は今まで滞納していた月謝を納入すれば卒業証書を発行する」とのことで、すぐさま父は手配をしてくれたようだった。父からは卒業証書を入手した旨の返事がきた。

　わたしは予科練にいたわけだから実際、早稲田実業には一年、まるまる行ってないのである。
　しかし、早稲田実業からはじつに気の利いた返事がきたわけだ。すなわち予科練の一年間は早実での一年に勘定しようじゃありませんか、という有難い返事がきたのである。すなわち月謝の納入で早実の卒業を認定してくれたのである。ほんとうに感謝の思いで頭が下がった。

　弘前での生活は一転しようとしていた。早実を卒業できたとすれば、上の学校への道も開けるわけだから。東京で勉強したいという強い思いがむくむくと湧いてきた。また東京に行けるかと思うと心がワクワクした。
　その頃からだ。弘前の散歩えを思う存分、し始めたのは。市内を歩いた。田畑も歩いた。おじや従兄弟に挨拶した。町の知人にも挨拶してまわったのだった。

　上京のとき、わざわざ父が東京から青森まで迎えにきてくれた。母は青森に残った。母は大きな二人ぶんのオニギリを作ってくれた。

　トラブルの思い出も、ここに書いておこう。弘前から青森をでて東北本線に乗り換えるとき、とんでもないことが起こった。青森駅で乗客に押され押されて、父は左に、わたしは右の車輌に分かれ別れになってしまった。まだ戦後の混乱がつづいていて、汽車の中は大勢の人たちであふれていた時代である。重い荷物はお米だった。

　それにカボチャと塩。父もわたしも同じくらい荷物をもっていた。
　ただし、握り飯に方はわたしが持っていた。このまま上野まで、と思うと気が遠くなってしまう。とりわけ腹を減らした父が心配である。だが、車内は人、人、人でいっぱいで身じろぎする余裕すらないのである。父に握り飯を届けようにも壁となった人をかきわけてゆかなければならない。移動するにしても荷物が心配だ。通路に新聞紙をひろ

げて座り込んでいたが、アミ棚の荷物と握り飯の包みをときどき見ながら一夜を明かした。
　東京に近づくにしたがって乗客は少しづつすくなくなり、座席にすわることができるようになった。腹がペコペコで、父を思うと申し訳ない気持ちだった。
　ようやく大宮駅に到着した。「リョーイチッ！ リョーイチッ！ リョーイチッ！」と叫ぶ声がした。
　自分の荷物の入ったリュックサックや握り飯の入った手荷物を力いっぱい腕力をふるい、慌てて背中にかつぎ、車輛を降りた。駅のベルが鳴り終わると車輛はゆっくりと動いていった。
　腹ペコのふたりは大宮駅のホームで、冷たい冷たい握り飯をたべた。それは、うまいうまい握り飯であった。ちょうどよい塩加減で白米の大きなオニギリであった。この握り飯のことは忘れることはできないと思った。

　父の宿舎は会社の飯場だった。同居の人たちが三人か四人くらいいた。そこはじぃぶんと雑然としたところで、それぞれが自炊していた。わたしはここでは長期間、お世話になることはできないと思った。父とふたりで、どこかで雨露をしのぐところを探すことを考えた。
　かつて家族と住んでいたところは焼け野原にままである。地主のところに尋ねていって再び土地を貸して欲しいと父といっしょに頼んだ。地主はこころよく同意してくれて、そこにバラックを建ててふたりで暮らす生活がはじまった。

　ほぼ同時期の昭和23年４月、御茶ノ水駅を下車してスグの神田駿河台の中央大学は経済に入学することになる。
　これも海軍で出会ったH一等兵という人生の先輩から学んだことだが、「これからは商業の時代。簿記を学ぶように」という言葉が脳裏にあった。
　この中央大学は明治18年、イギリスの法学系の学校としてスタートした。東京神田区神田錦町二丁目に「英吉利法律学校」として創立された。中央大学こそ神田生粋の江戸っ子なのである。
　大正15年に駿河台校舎が完成すると同時に移転してきたのであった。ここで井上達雄先生の簿記をはじめ、経済原論や税制などを学ぶことになる。
　この学校を選んだ理由の一つは、司法試験の合格者が東大を抜いて一位であることだった。実地応用の素養を養うという校風、そして校章は「白門」と称して白色だった。大学の校章のシンボルマークは「C」であった。

当時、教科書はすべてガリ版刷りで学校の前の本屋で購入した。昭和23年はまだアメリカの支配下にあり、食糧をはじめ不自由なことが多かった。

わたしは靴はなく、一年ぐらいは下駄をはいた。カバンは風呂敷を利用した。靴がとにかく欲しかった。学生で、しかし、このようなスタイルはごくごく普通のことだった。恥ずかしいと思う気持ちはなかった。

すべて戦災で失ったので物資はなく、日本中が貧乏だった。昼食は学校の食堂でコッペパンにジャムを塗りたくったものの余りにも甘くて口に合わず、学校の蛇口に口をつけ、水を飲んで飢えをしのいだ。

一方、贅沢もした。神田日活の隣のニコニコまんじゅうか、東京堂の「モウリ」のラーメン、御茶ノ水駅をでたところにある立ち食いのうどんなと、いろいろあったが、とりわけニコニコまんじゅうや、「モウリ」のラーメンはおいしかった。

しばらくしてから軍靴の払い下げ品が店をだしていた。足のサイズが合えば買いたかったが、貧乏暮らしをしていた父にはいえなかった。バラックの木材の費用がかさんだので、無理をいうことができあかったのである。

父はどこからかドラム缶を入手してきた。廃材を拾ってきてはドラム缶を改造した。風呂に入れば、生きていると実感した。

幡ヶ谷で暮らした。幡ヶ谷の駅から京王電車に乗り、新宿にでて国鉄の中央線に乗り、御茶ノ水駅までいく。この生活は大学にかようあいだつづいた。

父も息子とふたりで生活できるよろこびを噛み締めた。二人の自炊生活はかくも楽しいものだった。